

Essay

Sapiarc.com

2008年5月28日(2008-04)

【うま味発見 100 年】ドキュメンタリードラマ ‘AMBITION(志)’ を見て

これを読んでくれている人は誰でも「味の素」を知っていると思います。「味の素」を発明したのは池田菊苗(いけだ・きくなえ)という人だったことを知っている人もいるでしょう。

今からちょうど百年前の 1908 年(明治 41 年) 4 月 24 日, 当時東京帝国大学理科大学化学科教授だった池田菊苗は『「グルタミン」酸塩ヲ主要成分トセル調味料製造法』という特許を出願し, その特許は僅か 3 箇月後の 7 月 25 日に認可されました。この特許を基にして, 当時合資会社鈴木製薬所の実質的な経営者であった鈴木三郎助がこの調味料の製造・販売を引き受け, 製品名を「味の素」としました。池田自身は「味精」という名前にしたかったようです。その後, 「味の素」に関する事業は発展し, 会社の名称は何度も変わりましたが, 1946 年に現在の社名, つまり, 味の素株式会社になりました。「味の素」の化学名はグルタミン酸ナトリウムです。現在, 「味の素」は世界中で 200 万トンも製造されており, その製法は池田が発明した方法とは全く違ったものになっているそうです。

特許出願百周年を記念して, 味の素株式会社は表題のドキュメンタリー映画を製作し, その上映会が去る 5 月 24 日(土)に東大本郷キャンパスの小柴ホールで行われまし

た。この上映会は, この映画を初めて公開するもので, 味の素株式会社の山口範雄代表取締役社長, 映画を製作した五十嵐監督ら多数の関係者が出席しました。私も招かれたので出席しました。

この映画は, 池田が「味の素」を発明するまでの経緯をドラマ化したもので, 脚色されている部分はもちろんありますが, 史実を踏まえたものです。強調されていたことは, 「味の素」の発明が明治人池田の愛国の「志」の結晶であり, その志に込めたのが同じ明治人である池田三郎助だったということです。この「志」は池田が留学中に師事した Leipzig 大学の Friedlich Wilhelm Ostwald 教授(1909 年度ノーベル化学賞受賞者)の志とも響き合うものだったことが, このドラマの背景になっています。また, 池田が留学から帰国の途中, ロンドンに留学中だった夏目金之助(漱石)を訪問し, 暫くの間, 親しく交際したことも紹介されています。漱石が池田の博識と見識を高く評価していたことは, 漱石の日記に書かれており, ご存知の方もいると思います。

現在使用できる高度の分析技術がなかった 100 年前に, 昆布から抽出した「うま味」の本体がアミノ酸のひとつであるグルタミン酸のイオンであることを突き止めたこと, しかもそれを 2, 3 箇月という短期間に行っ

たことは、化学者としての池田の能力が高かったことを示しています。

重要な点は、池田がその発見を新しい調味料の発明に結びつけ、企業化にまで進んだことです。その裏には、‘うまい’食事によって日本人の体格を向上させ、それを通じて日本を欧米並みの国にしたいという「志」がありました。

私は、今から30年ほど前に、東京大学百年史の中の理学部化学科の項を執筆しました。その時、池田菊苗という人物について調べましたが、その結果として、池田には現代的なところがあり、興味深い人物であることを知りました。池田は「味の素」の企業化の成功によって裕福になり、一面では、飛び抜けた成功者となったのですが、その反面、学者としての悩みや家庭の経済的問題、また起業後は特許争訟などを抱えていました。これらについては、東京大学百年史ではもちろん触れませんでした。それから15年ほど後になって、東大化学科昭和8年卒で大阪大学理学部化学科教授を務めた廣田鋼蔵の著書「化学者池田菊苗 漱石・旨味・ドイツ」(1994)が東京化学同人から出版されました。この本には、私が感じていたことと同じことが周到な調査に基づいて丁寧に書かれています。インターネットで調べた限りでは、この本は現在でも入手可能です。

池田は教授の定年を待たずに、58歳で自ら辞職しました。その約2年後に行われた還暦祝賀会で、池田は次のような挨拶をしたと言われています。

《自分は大学の教授として純粋の学問の研究に専念し、其の方面に業績を挙げるべき位置にありながら、怠ったのは遺憾に思う。又味の素の発見等は不本意なものの一つで

ある。今後は純粋な学問をもっと深くやりたい。理科の教職にあるものは金もうけを第一にするような研究をなさらないようおすすすめ致します。》

これは、池田ほどの大才をもってしても、トップレベルの研究と起業家としての成功を両立させることはできなかったことを自ら認めたものだと思います。

研究者が研究成果を基に起業することが奨励される今日、有能な研究者は上記の池田の述懐に思いを致すべきではないでしょうか。
以上